

# 点訳通信

36号

盲人情報文化センター 点字製作係  
550-0002 大阪市西区江戸堀 1-13-2  
TEL 06-6441-0015 FAX 06-6441-0039

## 点訳講習を終えて

義平 孝

「点訳を始めようとした動機は？」って、よく聞かれるんですが、なんと答えてよいか困ってしまいます。私の勤めていた学校が「障害児」の原学級保障に取り組んでいたから、多少の接点はありましたが、確固たる信念や動機があったわけではありません。

友人の加瀬さんが「退職したら、点訳をやろうと思っている」というので、「じゃあ、私も」ってくっついてきた感じです。彼が事前に調べたところによると、点訳ならライトハウスが一番確かだ、というので、こちらの講習に応募したところ、最初に“ちょっとした”漢字の読み取りテストをやるとのことでした。

そのテストたるや、これが“ちょっとしたテストかよ”って感じで、少々驚きました。講習そのものは非常に楽しいものでした。当然のこととはいえ、受講者はみんな真面目で熱心な人達ばかりだったし、何よりも先生が素晴らしかった。講義っぷりが爽やかで、人生をしなやかに生きてるって感じでした。テキストに使われた『点訳のてびき』の表記が少々あいまいな所があったりして、「ああも取れる、こうも考えられる」なんて私たちが迷っている時に、的確な例がぽんぽんと出てきて、なるほどと納得させられる場面が再三ありました。というより、その繰り返しだったような気がします。

宿題にはだいぶ悩まされました。加瀬さんと電話でよく答え合わせをやりました。かえって間違ったこともありましたけど。でも、そのおかげで力がついたような気がします。日本語ってなんでこんなに難しいんや、と二人でよくこぼしたもんです。

学生時代は授業中、ノートに落書きばかりしていたのに、週1回2時間とはいえ、これほど真面目に真剣に“授業”を受けたのは、60余歳にして初めてのよう気がします。そんなわけで、この半年間は実に充実した時を過ごさせていただきました。

今、ダニエル・スティールの超訳ものに取り組んでいます。校正に当たって下さるのが点訳7年というベテランで、こちらが迷いに迷って、わけがわからなくなっているのに、あっさり答えが出てきて、拍子抜けするやら、さすがと感心するやらといった状態です。

こんな歳になって始めた点訳ですから、こっちがくたばるまでにどれほどのことができるのか考えてみると、微々たるものでしかないような気がします。それでも多少なりとも役に立つのかなと思って、小さな満足感を味わっているしだいです。

最後に、一緒に受講された皆さん方のご健闘をお祈りします。

（よしひら たかし）

# すっかり辞書とお友達

村田千佳子

子供の自立を目前にして、これからの自分のことについて考えなくてはと思い始めた頃、友達からこのセンターの話聞き、それが何故かとても心に残りました。数日して、やはり気になるので直接センターに電話したのが講習会を受講するようになったきっかけです。

いざ通ってみると、思ったとおり点字はとても興味深いものでした。特に毎回読みの練習用にいただく『サンポ』がとても楽しみで、宿題の中ではいつも最初に手をつけるものでした。それは点字についていろいろ詳しく書かれています。点字が6点で出来ている理由や、言葉の拍数が分かち書きの時大きく関係してくることも納得出来ました。中でも一番興味深かったのは、指先で感じた小さな刺激がどのようにして脳へ伝えられ、それを単語、文章へと組み立てていくかという触読のメカニズムです。まるでコンピュータみたいです。

点字の素晴らしさを知り、それと同時に漢字がとてもすぐれた文字である事、そして何よりも私にとって大きな壁であるパソコンに押し潰されそうになりながら、今最初の一冊を点訳しています。実際に点訳してみると、読めない漢字の多さに驚き（すっかり辞書とお友達になりました。）分かち書きにはいつも頭を悩まし、「もう一度講習会から始めたい。こんな状態で続けてゆけるのかなあ…」と不安になります。

それでも校正の度にいろいろ親切に教えてもらえると、一人ではない仲間のいる事がうれしく元気が出てきます。これからもよろしくお願ひします。（むらたちかこ）

# 点訳講習会を終えて

野上満智子

何年も前、ラジオで永六輔さんがボランティア活動を「思いつきでいい、気紛れに、気軽に始めてみましょう。」という風に話されているのを聞いて、随分、肩に荷が軽くなった気がしました。そして、それならいつか自分にもできる事が見つかるだろうと思ったものです。

今回、点訳講習会を受講して、僅か6点であらゆる事を表記しなければならない難しさと細かな規則の多さに本当に驚きました。緩みかけた頭がついてゆかず、いつも沢山の宿題に悪戦苦闘。それにも拘わらず返されるプリントの情けない結果にがっかり……。

身近に視覚障害者の姉を見てきた自分としては少しはわかっている積もりだった視覚障害者の方々の当然の文字への想いと、それゆえにこそ求められる正しい点訳に対する厳しさを講習を通じて様々な知ることが出来、今までの安易な気持ちが吹き飛びました。

臓器提供ではないけれど、自分の目が点訳を通じて何倍にも役立てられるようにこれからはがんばっていきたいと思います。皆様、どうぞよろしくお願ひいたします。（のがみ まちこ）



# ボランティアとは

岡田允子

六ヶ月にわたる、ご熱心でご親切なお導きを頂き、講師の先生方や施設の皆様方に、心から厚く御礼申し上げます。

講習会開始が待ちきれず、二、三ヶ所で点字の手ほどきを受けましたが、その何処よりも充実し、一日たりとも休み得ない徹底したご講義に、「点字」への認識を新たにすると共に、私より遙かに若い講師の先生方の澆刺としたお姿に、「こういう生き方もあるのだ」と、深く教えられた日々でもありました。

三月十九日、始めて共同作業の現場に出して頂きました。

既に十余名の皆様、わき目もふらずお仕事に没頭しておられました。

ご紹介いただいた後、ご経験深い方が就いて下さって、早速校正が始まりました。

点字がスラスラ読めぬ私を、労り励ましながら、少しの疑点でも、一々辞書に当たり、確かめて下さいます。

いい加減な「仮り打ち」が申し訳なく、約二時間後、何とか予定を終了した時には、首うなだれ、深く己を恥じておりました。

三月十日、修了式の茶話会で、感謝の言葉もそこそこに、「希望する本を、点訳させて頂くことは出来ないのですか」と、私は不服めいた発言をしていたのです。

昨年一月、夫を看送って、子も無く、全くの孤りとなりました。満中陰、百ヶ日と、諸行事や片付けが済んでしまうと、どうも落ちつきません。

念願であった読書の明け暮れも、「過ぎたるは……」の言葉の如く、お米を磨ぐ時など、特に、「これ、何の為に？」と、自己のみに生きる申し訳なさが、頭をもたげて参ります。

今迄、人様のお世話になりこそすれ、何のご恩返しも出来ませんでした。全くの「お釣りの人生」となった今こそ、報恩行のチャンスだと、思い巡らせました。

三十代の頃、結婚生活の余暇を注ぎ込みたく、点訳道具一式を揃えたこともありましたが、諸事に紛れて、果たせませんでした。

「時機到来」と五月末、当館へ問い合わせた処、講習迄日があるのでと、近くの同好会をご紹介いただきました。

点字版で教えて頂いた、点字の組み合わせがとても合理的で、すっかり魅せられ、毎週せっせと通い続けました。

「命果てる迄、為す事がある。」「点字で、書物が残せる。」

見識も経験も、文才もない私が、目の見えない方々の為に、自分が感化を受けた書物を読んで頂くことが出来る、という喜び。

処がこれが、とんでもない「我欲の塊」であったことに、作業の第一日目で、はっきりと分らせて頂くことが出来ました。

皆様、難しい点字を修得され、お互いに切磋琢磨しながら、長い年月をかけて習熟してゆかれ、初心者を育てつつ、少しでも正確な書物を提供しようと、貴重な時間を精力を捧げておられるご様子。

更に、当館の方針も、書物をこちらから奨めたりせず、利用する方々の要求に従って点訳している、とのこと。

凡て、相手の為の「無私」の働き。

これこそが、真の「ボランティア精神」なのだと、至極当然の事ながら、初めて社会へ出た私は、改めて実感させて頂きました。

間違いだらけの怠惰な宿題を毎週丁寧に直して下さいました講師の先生方、忙しく立ち働いて下さっています職員の皆様方、黙々と校正に没頭しておられますボランティアの皆様方の、清々しい、晴れやかなお顔を拝しながら、晩学の歩を一步宛進めて参りたく、お世話をお掛けするばかりですが、末永くよろしく願い申し上げます。(おかだ のぶこ)

## 点訳講習を受講して

加瀬 孝

私は高校大学の頃、漱石の作品を愛読しました。後日、『坊っちゃん』や『三四郎』を映画かテレビで観て失望した経験があります。その頃、ある図書館で点訳図書が非常に少ないという話を聞きました。間に何も介さず作者固有の文体と向き合い、自らイメージを創り上げる、つまり「作品を読む」という点で、文字の音声化等の機器が発達した今も、点訳の必要性は変わらないと思っています。

私は最後の勤務校で二人の若い女性教師に出会いました。一人は、耳の聞こえない親にせつせと手紙を書いては生徒に持って帰らせ、一人は、目の見えない保護者に時間を割いて点字の手紙を打っていました。私と同年配の友人が、聾学校に校長として赴任した折り、生徒達が手話通訳の先生を注視し「オレのほうを見てくれない」ので懸命に手話を習っていると目を輝かせて語ってくれました。

そんなこながきっかけで、退職後点訳を志すことになりました。

6か月の講習は楽しく充実したものでした。かつて、これほど緊張を持続し主体的に学習に集中したことがあったろうか。毎時間、未知の世界に踏み込む楽しさもさることながら、厳しくしかし柔軟に対応して下さる講師の先生に、回を追う毎に魅了されたせいでもありました。友人の義平さんにいたっては、仕事の都合でやむを得ず休んだ時「先生にお会い出来ないのが残念」と口走る始末でした。『手引き』は読んでいくけれど、それが、ひとこと解説して頂くことで、ひとつの例を付け加えて頂くことで理解でき納得することが多かったように思います。受講生の皆さんがそうであったように私も宿題は一生懸命にやりました。(常に全員提出でした。否、一度だけ、これは、私のパソコンの師匠でもあるし本人の名誉の為に名前は伏せますが、集める段になって「えっ、そんなあったんか!」と素っ頓狂な声を上げた御仁がいらっしゃった位かな。) 返される度に義平さんと朱筆の多寡や丸の有無を競い合ったものです。

義平さんとは語句の切れ続きを巡ってよく議論しました。彼は理屈で私は語感でという構図です。教室にそれを持ち込むと、先生は「だってこうでしょう」と、明快な原則と適切で豊富な例を挙げて説明してくれます。私達は完膚なきまで撃退されます。それはむしろ心地よいものでした。そのやりとりの中でも、「目が見える」立場からの発想の過ちに気づかされ、思い込みの怖さを知らされ辞書を引くようになったことも私にとって大きな収穫でした。

ある会合で、夫が全盲の方から「点訳ならライトハウスが確かですよ」と教えられてこの講習に参加させて頂きました。2時間の楽しい緊張と講師の先生にお会いする楽しみは無くなったけれど、この6か月の財産を大切に、その評価を落とすことのないように微力ながら頑張ります。

(かせ たかし)



# 点訳を勉強し始めてみて

宋戸邦榮

私と点字の出合いは、妹が点訳をしていたこと縁もあって、点訳は緻密な仕事ダナと見ていた通りすがりの人みたいなものでした。

停年後、自分が望んでいた事が、いろんな条件に阻まれて、駄目だと落胆していた時に浮かんできたのが点訳です。時々、漢字の読み等を質問されたりして、文章や漢字の好きな自分にもできるかもしれないと思ったのです。ところが受講を始めてみると、考えていたとは多少異なり、細かな事の苦手な私には四苦八苦の上、年齢による記憶力の減退を思い知らされた次第です。できないかもしれないと悩みましたが、そこは年配者のあつかましさで、他人が一ヶ月でするところを私は三ヶ月でやろうと開き直りました。が、現実には始めてみるとパソコン操作に戸惑い、折角点訳した八十頁余を消滅させたりと点訳以外のところでもパニック状態になり、又、又、できないのではないかと悩んでいるこの頃ですが、一方で、何かをコツコツ仕上げてゆくのは嫌いではないので、何とかなるカナと密かな希望も持ち始めています。

劣等生をご指導くださった荒谷さん、国本さんに感謝申し上げますと同時に、これからも周囲の皆様迷惑をお掛けする事になりそうですが、努力して勉強してゆきたいと思えます。

(ししど くにえ)

# 言葉は珠玉のように輝き

荒田恵子

毎回、充実した中身の濃い点訳技術講習会に参加させて頂き本当にありがとうございました。自分の教養の低さに困惑し、気持ちを締め真剣に取り組まなければと何度も痛感しました。と同時に楽しい時間でした。昔から「好事魔多し」といいますが、講習期間中に辛い悲しい事が一度に起こり、4月初めには4人家族から急に一人ぼっちになってしまいました。私の場合、講習会に出席する事が心の「ささえ」になっていたようです。当分は自分を励ます為の点訳になってしまいそうですが、少しでも語彙をたくさん自分のものにしていく事、そして自在に点訳ができるように頑張っていきたいと思えます。

今、点訳するのにお借りした本を一語一語読んでみて、作者の言葉に対する造詣の深さや適切な表現などに感銘を受けました。日本は古来より「言霊の幸ふ国」といわれ、言葉は珠玉のように輝き、まさに生きています。今までともすれば流し読みをしていた自分が恥しいと思えました。本を読みたいと思うには精神的、経済的なゆとり、自身の可能性への意欲などが必要かもしれません。そのための手助けもできたらなあと思えます。

(あらた けいこ)



## 盲ろう者とコミュニケーション

11年度初めの勉強会は、5月12日（水）午後1時から9階の交流ホールで、<sup>シヨホン</sup>慎英弘さんの講演でした。出席者は18人。

「視覚・聴覚の重複障害者（盲ろう者）」についてお話して頂きました。慎さんは開口一番「私は52歳、子どももいます。」と、自己紹介され、さわやかに話を始められました。今までに3冊の本と論文を多数書いています。慎さんは小学校3年生の時失明、龍谷大学などで学ばれ、現在、花園大学の社会福祉学部で障害者福祉についての教鞭をとってらっしゃいます。障害者福祉についての研究成果を3年後には出版する予定なので、本を読むなら、図書館でカッテ（借りて）読むのではなく、買って読んで下さいと、ちゃっかりとご自分の本の宣伝をしてから本題に入られました。

盲ろう者の現状、盲ろう者とコミュニケーション、盲ろう者への援助、大阪盲ろう友の会、盲ろう者と人権、ガイコミ（大阪市ガイド・コミュニケーター派遣事業）、それぞれについて、私たちのまったく知らなかった盲ろう者の方々を取り巻く状況を真摯に話して下さいました。

盲ろう者とは、目と耳の両方に障害を併せ持つ人で、視聴覚2重障害者の事であり、ヘレン・ケラーはことに有名です。

盲ろう者に関する全国的な実態調査は行われていないので確定はされていないが、約2万人と推定され、だいたい5千人から1万人に1人の割合でいるそうです。盲ろう者は視力や聴力の程度（全盲・弱視・ろう・難聴）、いつ盲ろう状態になったか（先天か・後天か）、さらに盲ベースの盲ろう、ろうベースの盲ろう、同時期に盲ろうになったのかによって大きく24タイプに分けられます。

コミュニケーションの手段は主として点字、指点字、手話、触手話、指文字、手書き文字、拡大文字、音声があります。これにより、彼らのコミュニケーションの手段は、各自が獲得している手段で、発信と受信、各自それぞれ異なります。ですから、いろいろなタイプの盲ろう者の会合では、間に通訳者が必要だし、通訳者が介在するので盲ろう者が発信した情報が正しく相手の盲ろう者に伝わっているのかきちんと確認しながら進めなくてはならないので、大変、時間がかかるそうです。

いろいろなタイプの盲ろう者のいろいろなコミュニケーション手段を聞いているうちに頭がこんがらかってしまいました。

視覚、聴覚はコミュニケーションや情報収集に大変大きな役割を担っていることをあらためて感じました。

お話が一息ついたところで、指点字や盲ろう者のお仕事などの質問が出されました。パソコン点訳を手掛けている人は指点字通訳は馴染みやすいのではないかという事でした。

1996年に全国で初めて、大阪市にわずかではあるけれど支援体制ができました。大阪府下にもそして全国的にも、行政の理解が示され、みんながもっともっと彼らの事を知り、支援の輪が広がるようにと頑張っている姿には頭が下がりました。

四宮 陽子



# お知らせ

## 校正体制について

新年度を迎え（というには遅すぎますが）、新たに点訳活動に参加していただいた方も多くおられますので、盲人情報文化センターでの校正システムについてご説明しておこうと思います。

入力はそれぞれのご家庭でしていただくわけですが、まずは入力したデータと原本を必ず照合して下さい。その際、その日に入力したものを同じ日に照合するよりは、ある程度（2、3日から1週間）時間をおいて照合した方がミスに気づきやすいということが一般的にいえるようです。

点訳者自身が原本と照合して修正済みのデータを毎週または2週間に1度程度当館にお持ちいただき、墨点字で第1回目の校正をしますが、この時、2つの形態をとっています。

一つは、点訳者自身が原本を見、他の点訳ボランティアがその墨点字を見ながら、読み合わせ校正をするという方法です。この方法では、墨点字を見る人も固定している場合が多いので、「ペア校正」と読んでいます。

ペア校正の利点としては、最初から最後まで同じ人が読み合わせをするため、漢字の読みや分かち書き、レイアウトなどの統一がとれることがあげられますが、その裏返しとして、点訳者あるいは校正者の強い思い込みが（実は間違いなのに）通ってしまうことがあります。

もう一つは「グループ校正」と呼んでいる方法です。これは、入力者は校正にはタッチせず、打ち出したデータと原本を他の2人のボランティアが読み合わせ校正をするもので、多くの場合、校正者はその日その日で変わります。

この方法の利点としては、点訳者と校正者2人の計3人の目を通すわけですから、ミスの発見率は高くなります。ですが一貫してその原本を見ているのは点訳者1人ですから、校正の統一性に欠けるということがいえます。また、校正者が毎回変わるということで、1校終了後のデータを見てみると、ミスの種類や頻度に大変ばらつきが見られるということがいえます。

火曜日から金曜日まで各曜日毎に担当していただくスーパーバイザーをお願いしていますが、校正の方法はその方の方針を尊重しています。火曜日と木・金曜日はグループ校正を中心に、水曜日はペア校正を中心に行っています。

この二つの方法にはそれぞれ若干のバリエーションがあります。二つの方法はどちらが優れているとか劣っているというものではありません。皆様のご都合と好みで選んで下さい。

1校の終わったデータは再度墨字打ち出しをし、2校を担当していただく方に回します。2校の原則は原本との読み合わせをせず、必要に応じて原本を参照するという形をお願いしています。2校者から点字で校正表をいただき、それに基づいて職員がデータの修正を行っています。

2校の校正表は点訳者に見ていただくことにしていますが、その際赤鉛筆の印のあるものは、2校校正者の思い違いと判断したもの、青い印のついたものは、指摘は正しいが今回は「点訳者優先」として修正しなかったものを表しています。校正表について疑問や意見がありましたら、遠慮なく職員に申し出てください。



## 2校校正者の方へお願い

2校でご指摘をいただく際、「間違い」としてあげていただく場合と、「間違いとはいえないが他の箇所との統一がとれていない」ということで書いていただく場合があります。特に漢字の読みや分かち書きについては、二様どちらでも可とする場合がありますので、「間違いではないが、同じ本で両様が混在するのはまずい」というケースが出てくると思います。

「間違い」としてあげていただく場合はいいのですが、「統一をするために」として指摘していただく際は、例えば「（統一のために）」など一言校正表に書き添えて下さい。

二様どちらでも可とするような場合、この但し書がないと、「どちらでもいいから点訳者優先にしよう」と思い、不統一な完成データになってしまう恐れがありますので、宜しくご協力下さい。

## 遠隔地で活動されている方へ

3月に「複合語の分かち書き（実は「複合名詞の分かち書き」）について」ということで、説明会を行いました。その説明会用の資料としてのプリントを来館ボランティアの方々に配付しましたが、遠隔地で活動していただいている方々には、「完全な資料ではなく、混乱や誤解の懸念もあるため」配付しませんでした。



説明会后、出席された方々のご意見やご質問を参考に、若干の補足・修正の箇所をまとめたものを今回来館ボランティアの方々に配付しました。来館ボランティアの方々の間でこの資料の運用が安定し、さしたる問題もないようでしたら、改めて資料を作成し、遠隔地の皆様にもお送りすることにしておりますので、今しばらくお待ち下さるようお願いいたします。

## ファイル名

Windowsパソコンが普及し、ロングファイル名が利用できるようになりました。また標準で日本語変換ソフトを付属していることもあって、漢字や長い名前のファイル名をつけておられる方がありますが、当館ではまだまだ、DOSパソコンが健在です。このDOSパソコンとの相性をはかるためにも下記のことをお願いします。

- (1) ファイル名は巻数を表す数字も含めて半角8文字以内に
- (2) 全角仮名や漢字は使わない

以上よろしく申し上げます。

漢字を使用されますと、使えないプリンターがあります。またロングファイル名を入力されますと、DOSパソコンでは巻数とは関係ない連番がつき、間違いの元となります。

